

## 第7回御殿場市市民協働型まちづくり市民会議 議事録

日時 : 平成16年11月11日(木) 19:00~21:00

場所 : 御殿場市役所第5会議室

参加委員 : 吉福、勝又、佐々木、近藤、神保、鈴木(愛)、林、関田、渡辺、三井、芹沢、勝間田、鈴木(喜)、佐藤、大塚、南、山本、沓間、小林 合計19名

事務局 : 池田、鈴木(地域振興課)

山本、福嶋(株ダイナックス都市環境研究所)

### 1 会長あいさつ(芹沢会長)

市民会議の芹沢会長があいさつを行った。

### 2 今後の進め方および本日の検討項目について(ファシリテーター:山本)

- ・本日配布した資料5に今後のスケジュールを示した。これまで5回の会議をしており、2~4回はワークショップの形で、協働の現状、市民団体や行政の課題について検討作業をした。前回の第5回は、個々人の思いをパネルディスカッション方式で議論した。
- ・事務局から言われているのは、1月中に市長に指針の意見書(たたき台)を提出することである。それに向けて、今後は指針の中身の議論に進むことになる。
- ・今日はまず世田谷視察で見てきたこと、感じたことについての、意見交換を行う。その後、アンケート結果が出てきたので、その報告をしたい。資料2の後ろにたくさんの自由意見が出てきている。素晴らしい意見が出てきていて心強い。市民会議でもずれた議論をしていないこともわかった。
- ・そして指針の検討項目についてだが、まだ我々も事務局も、指針のイメージが共有されていない。資料4には、今までワークショップで出された意見を整理して柱立てをしてきた。1つ目はなぜ市民協働が必要かということ(協働の背景)、2つ目は、協働の定義や理念について。3つ目は進める上での原則について。行政と市民が何かやる時のルールのようなものである。たとえば情報を共有する、信頼感を構築する、自己責任など。
- ・4つめは具体的に進めていくための方策(政策メニュー)。例えば、市民団体への支援。拠点の設置。職員の研修など。これまでのワークショップでも様々な意見があった。
- ・これらについて、後で意見をいただいて、大きな枠組みを共有した上で議論を進めていきたい。



### 3 世田谷区視察についての意見交換

委員 A 組織がしっかり出来ていると感じた。特に基金があり助成制度があることに感心した。

委員 B 欠席したので質問である。世田谷の取り組みが始まった時の、区長のリーダーシップや考え方があれば聞きたい。

山本（ファシリテーター：以下略） まちづくりの流れとしては、都市デザイン室（都市美などソフト部門）と街づくり推進課（再開発などハード部門）の2つの流れがあった。2つの流れが80年代以降にユニークな動きになった。都市デザイン室では、バス停や広場、清掃工場の煙突、公共トイレなどのデザインコンペを行った。世田谷には建築家やデザインに関わる人が多かったにも関わらず、それまでは何も貢献していなかったが、仕掛けをすることで関わるようになった。

街づくり推進課では、専門家を派遣して地域住民が自主的な活動が出来るように、支援を行った。そのような流れの中でまちづくりの機運が盛り上がってきて、それを支えるために公益信託制度を活用したファンドの仕組みをつくった。首長の姿勢もあるが、成功体験の積み上げがこれまでの成果を生んできたといえる。

委員 C 組織（公社であるまちづくりセンター）がしっかり出来ていると感じたのが第一。しかし御殿場では人口が世田谷の10分の1しかないが、（センターのように）市役所の他に人員を集め、組織をつくる必要があるかどうかについては、消極的かもしれないが疑問に思った。行政改革をしている時に、人件費を新たに使うような組織を考えていいのか？また、世田谷の区民は、多くのグループがあり、こんなにも参加者があるのかと思った。これほど啓発して出来るのかと感心したが、翻って反省も感じた。

委員 D 当初の取り組みが1992年に始まり、10年以上経っている。率直に言って、担当者の情熱は若干落ちているように感じた。立ち上げは新鮮な気分もあったかもしれないが、現状については苦渋の表情もあったようだ。どこでも直面しているような問題だろう。印象に残ったのは、民間団体に対して「背中を押してあげる」姿勢を行政が持つことが大事だということ。お金もない中で、共感的な相談相手になり、具体的なノウハウを教えてくれる。こういう行政の姿勢が常に民間団体を育てる。協働型のまちづくりを進めようという行政の姿勢があれば、道がひらけると思った。

委員 E 商売上、まち並みを見ているが御殿場でもぱっとしない状況である。世田谷ではもっと楽しんで見せてもらえると思っていたが、机上の話が多くてがっかりした。商店街や、まちの中に見苦しいところがないかどうか見たかった。

委員 F まちづくりセンターは直接悩みを相談できるところで、情報センターの機能があり、市民の情報不足を補える良い仕組みであると感じた。ファンドの助成団体の発表会は、市民が何か認めてもらいたいという気持ちを汲んでもらえるような仕組みであり、非常に良いと思った。

委員 G 組織的なまちづくりの先進地ということで、色々参考になった。ただし防災のことを質問したが、あまり答えてくれなかったのが、がっかりした。

委員 H 世田谷でも防災に取り組んでいるという話があったので、その話が聞けなかったのは残念だった。ハード面については楽しいまちづくりをやっていると感じたが、高齢者福祉についてはどうやっているのか？という疑問もあった。

山本 センターの裏あたりが、三軒茶屋の防災まちづくりをやっている所である。

委員 I まちづくりセンターが専用の「はこもの」でなくて出張所の一画にあることに驚いた。ファンドの仕組みなどソフト面が、区民のレベルアップをさせる役目を果たしていると感じた。ソ

フトが充実している印象があった。

委員 J 事前に資料を読んで、職員のレベルがさぞ高いのだろうと考えていたが、そうでもないということを知り、難しいものだと思った。まちづくりセンターを立ち上げた頃には、一緒にやっという雰囲気があったのだろうが、だんだんそれぞれの役割が定型化してくると、区が「それはセンターでやれば良い」などと言うようになり、行政がおうおうにしてありがちなことで気をつけないといけないと思った。



委員 K 欠席したが、市民の方はどんな感じで行政に関心を持つようになったのか、見たかった気がする。

委員 L まちづくりについてまだ理解できていないので、本当に役にたったのか疑問である。農業での協働を考えているが、形が見えていない。一般の人は農業への期待や理解があるのか？自分でもわからないし、教えてもらいたい。

委員 M まちづくりという大それたところに出てきていると思う。まちづくりというだけでなく、自分の生活では、何かの行事や会合などに行こうとするだけでも大変である。まだまだ男女協働もできていないと感じ、気後れしてしまう。

委員 N 体調をくずし欠席した。皆さんの話を聞かせていただき、参考にしたい。今日はふれあい給食をしてきたが、皆が気持ちよくやっております喜んで。この姿を見ると何としても続けていきたい。それを行政にもお願いしたい。

委員 O しばらくぶりの東京だった。担当者の説明だと、NPOの3文字が詰まった感じに聞こえたが、その先の話が見えてこない。世田谷より新しいことをやっているところもあるようだ。具体的な話は、煙突のデザインコンペの話で、最近の話はあまりなかった。率直に言うと、世田谷では今悩んでいるのではないかと感じた。活動するためのグループをつくっても、つくりっ放しでその後が見えていない。防災もそうだが、障害者の話も出てこなかった。中身がないようだ。御殿場でやっていく上で、実際にグループが出来たとして、問題はその先の活動である。

委員 P センターに置いてある参考図書に驚かされた。自分が地域の子供会に携わった時に、誰に相談して良いかわからなかったが、センターのように行政でも民間でもなく、相談できる場所があれば、「最初の一步」のきっかけになると思った。

またファンドの発表会で、自分たちのやっていることが採択されたりされなかったり、評価されることで、自分たちの取り組みが手に取るようにわかることは良いことだと思った。

職員の意識がそれほどでもないと言われたことにはほっとしたが、まちづくりに携わる研修を増やすことで意識が変わってくることは、自分がいま実体験しているのだから、組織やネットワークに職員を派遣することは効果があるのだと感じている。

委員 Q 10年前に環境デザインの研修に行かせてもらった時に世田谷の話を知った。女性の担当者がざっくばらんな形で講義をした。煙突の話も聞いたが、世田谷をきっかけに川崎や神奈川の煙突も良くなって、高速からはきれいな煙突が立ち並ぶことになったようだ。トイレの話も聞いたが、トイレというものに意識を集中するのは、当時新しいことであった。公園のトイレをつ

くるとしても、近隣の住民のワークショップで色やデザインを決めたが、その効果として、協力した市民が、皆で順番にトイレの清掃をすることになった。公共トイレは都会では防犯上難しい場所であるが、そういう場所でも市民がきれいに大事にしようという意識につながった。犯罪とか壊すとか、汚すということがなくなった。

その当時の世田谷は元気よく輝いていたが、いつか疲れてしまうのではと言ったことがある。当時の担当者は区民の意識が根付けばと言っていたが、逆に職員の熱意が薄れていくという話をきくと、やはり組織的になるとマンネリ化してしまうと感じた。新しいことを組織に取り入れるときはがんばろうという気がおこるので、新しく世田谷のことを真似ているところの方が元気がいいのかもしれない。

自分はハード屋なので、施設をつくる上では勉強になった。市民の声を聞くことが施設を大事に使ってもらえる第一条件になるということがわかった。

委員 R 仕事の都合で欠席した。まとめの資料で、職員の研修についての質疑を見ると、それほど意識が高いわけではないという回答なので、びっくりした。立ち上げて 10 年強ということだが、当初の職員の気持ちや組織の動き出す体制はどうだったのかを聞きたかった。

委員 S 事前に資料を熱心に読んでいった。一番の関心は、公益信託の中の財源効果について。2 つ目は、街づくり条例とセンターとの整合性、市民の理解度、条例の効果であった。財源については、寄付行為が思わしくなく、区が出しているということであった。財源確保は難しいと感じた。

団体の活動については、助成金が 5 万円でどういう効果があるのかと思ったが、感心したのは運営委員会の組織構成の中に市職員が関与していないこと。行政が窓口に撒している、気負っていないので、長続きするのではという安心感がある。

センターの機能をどういう形で発揮していくかというのは、市民サイドの意識の問題である。職員ががんばりすぎないのが良いのでは。しっかりと市民が意見を出し合うことが大事だと感じた。

また、この委員会が始まるにあたり、図書館で「協働」のことを探したが見つからなかった。センターに街づくり関係の図書がたくさんあることは、市民団体が情報公開を受けながら、勉強できるということで効果が大きいと思った。

杉山（事務局） ファンドのことは気になっていたが、財源確保は時節がらむずかしいということを確認した。図書室に参考図書があるのは、来た人には便利だと感じたが、読むスペースが少ないのは気になった。市では、世代間交流施設を計画しており、どうアレンジするか検討中である。スペース的には世田谷より使いやすいものが出来そうだと思っている。本当は、いろんな団体が計画段階から施工まで関われば一番良いと思うが、隣の課がやっているのでも、市民との協働という意味では残念な状況である。しかし皆さんの意見は出来るだけ反映させていきたい。

池田（事務局） ファンドの件では、低金利などで行き詰まっているというのは残念であった。80 年代から条例をつくったことで、職員の意識改革がかなり進んでいると思ったが、そうではなくがっかりした部分もあった。80 万人の人口にしては、センターは狭く、ごく一部の人にしか利用されていないのではないかと思った。市ではもっと使い勝手の良いものにしたいと感じた。

鈴木（事務局） ファンドでは初動的団体への助成があったが、御殿場でも今年公益事業ということで同じことをやったが応募が少なかった。世田谷だから次々と応募があるのだと思う。御殿場の場合、初動的な団体に 3 年助成したらそれでいいのか？という疑問もある。グループの方にど

という助成がいいのかを聞きたいと思った。また、センターのような組織については、御殿場の規模でつくるのは難しいと感じた。その代わりに、中間的な役割を担うNPOが市民の側から出来てくると最高だと思う。

建物については、行政らしくない建物で最初はびっくりしたが、市役所ホールなど市民が入りやすいところを開放した方が、市民グループも活動しやすいのではないかと、逆の感想をもった。人がガサガサしている方が、かえって使いやすいのではないかと思い、皆さんにも意見をきいてみたい。

山本

ファンドはバブル直後に出来たが、公益信託制度は当時注目されていた。まちづくりの公益信託をやっているところは、世田谷以外にもあるが、どこも基金運用には困っているようだ。

他の事例では、那覇市にNPOサポートセンターがある。企画課の所管で、NPOが運営委託をしている。職員が1人いて、誰でも入れてパソコンが使える「溜まり場」になっている。活動助成や、講座をひらいたりしている。

世田谷のファンドは予算が500万で、区の予算規模からいってわずかであるが、得られる効果は大きい。皆さんの感想にあったように「背中を押してあげる」というのは大事なことである。実際はもらえる金額は少なくてもいいが、ファンドが認定しただけで、企業に行く時などはお墨付きになるので、市民が動きやすくなる。そういう意味で5万円でも価値がある。市民活動を第三者が評価し、支援をするという制度という意味では参考になる。

実際の協働の現場（防災、福祉、農業など）がわからないという意見があったが、まちづくりセンターは情報センターであり、現場と直接関わっているわけではない。世田谷区は80万人もいるので、支所単位に分権している（大都市制度のモデルと言われる）。ハードのまちづくりをする場合、建築課や都市整備部など本庁が採配するのが普通だが、世田谷の特徴は、技術屋の職員を支所に配置していることである。80年代に支所の職員が、住民と一緒に公園やトイレをつくるなど面白い取り組みをやった。

もう1つは、地域ごとに「まちづくりハウス」と言われるNPOがある。本当はそこも視察してほしかった。例えば「梅丘まちづくりハウス」というのがあるが、梅丘では総合福祉センターがあり福祉のまちづくりをやってきた。そのNPOは、経験を積んだ市民が、他の市民活動をサポートする市民活動をしている。

職員のレベルはたいしたことがないという話があったが、いずれも同じようだ。御殿場なりに、世田谷をしのごような工夫をする必要があるかもしれない。10年経つとマンネリ化していて、ストックでやっている雰囲気がある。今節目にきているようだ。職員も成功体験の裏づけがあるから何とかやってきたが、制度ができてしまうと柔軟に対応できない。チャレンジしにくいところがある。

昔、世田谷の人たちと一緒に活動したが、「まちづくりハウス」という名前で、プレハブの建物があり、そこをまちづくりセンターが出来る前の実験場としていた。建築家やデザイナーが関わり、30代の若い人が集まって



くるような講座「界限塾」をひらいたり、将来の施設で何をやるかというようなことを考え

て、モデル事業を積み上げてきた。アクションリサーチをしながら、センターをつくってきたという経緯がある。

建物については、今のセンターはもともと銀行があったビルである。今は1階がドラッグストアで雰囲気全然違う。あとから何かつくるとすぐに追いぬくことができる。

ということが協働かというのは、視察では見えなかったかもしれないが、他に何か調べてほしいことがあれば対応したい。

委員C 区民全体には意識は徹底しているのか？

山本 区民全部が知っているというより、何かやりたい時に助けてくれる制度があるということだろう。何かやりたい人にとっては、取り組みやすい状況にあるのではないかと。枝分かれして新しいことができる可能性もある。

世田谷で、面白いことをやっていた職員はもともと民間出身だった。また、その頃いた人が大学の先生になったりもしている。世田谷では囑託の人や専門員を入れていることが多かった。色んな人材を寄せてやっていこうという動きがあったかもしれない。行政の戦略としてマクロな動きをしてきたという印象がある。

委員S 防災についての話があまりなかったが、あの町並みを見ていると、新潟地震くらいがくるとひとたまりもない。御殿場が助けてあげるような体制にしないといけないのでは？

委員H 地域性があるので、別の地域でやっていることをそのまま持ってくるのは無理。アンケートを読むと、高齢者の回答者が多いようだが、どのような内容であるかに興味がある。描いているまちづくりよりも現実的な問題が出てくると思う。そうすると御殿場は御殿場らしいまちづくりを考えないといけない時期にきている。お金のことは公社ありきではなくて、御殿場には財産区がつきものである。そのことを忘れてしまって、ファンドが成り立つかは疑問である。ファンドとは全然別なものとして、公社として立ち上げるのか、今までのような財源を求めるのか？形だけではなく、心のあるまちづくりを考えていきたいと思う。

委員S 介護保険制度が出来た平成11年度から数年かけて、福祉のまちづくりの答申をした。せっかくいい答申があるのだから、ハード面も含めて、その機能を委員会の中で議論していく必要もあるのではないかと。

委員H 公社が出来た場合に、いろんな人の知恵が集結すれば、良いまちづくりが出来そうに思う。いつまでも年寄りが昔は良かったと言っている時代ではない。

山本 世田谷の真似をしようとするわけではない。御殿場らしい、御殿場の資源を活かしたようなことを考え出していきたい。世田谷に行って、それほど大したことはないと思ったのは自信になり、重要な経験である。

明日は三島のグランドワークのことを聞きに行かれるということで、その情報も参考になると思う。

#### **4 アンケートの結果報告**

・市民および市民団体アンケート結果について、ダイナックスの福嶋が報告を行った。

山本 アンケートの選択肢はワークショップでの皆さんの意見をふまえて作成した。特に市民団体の結果は、議論してきたことに近いようだ。一般の市民については、回答率4割というのは、督促を出した結果の数字である。御殿場では通常30数%の回答率だと聞いている。4割しか回答していないという一方で、書いてくれた人はぎっしり自由意見を書いてくれたのは、少し

意外であった。回答した人は協働や市民参加に関心があるのだろう。なかなか参考になる意見がたくさんある。こういう市民がいることがわかっただけでも財産である。仕掛けをすれば、もっと多くの市民が参加してくれる可能性が高いと考えられる。

市民団体の結果では、高年齢の方が多く活動しているのはあまり未来がないともいえるが、一般市民の結果を見ると、居住年数5～10年という比較的新しい人たちの参加意識は高いようだ。こういう人は若い世代だろうし、十分な人的資源があると思われる。

## 5 今後の進め方

山本 今後はこの会議で指針の素案をつくり、市長に提出し、庁内の検討委員会で議論していくという段取りになる。これまで議論したものを整理して、御殿場としての協働の定義をつくって、進めるためのルールを明確にし、具体的な方策を盛り込んだらどうかと考えている。

資料5にスケジュールがあるが、3月までにまとめればよいと思っていたが、2ヶ月ほど前倒ししないといけなくなった。3月には市民に公表できるような形にしないといけない。

このため、忙しい時期ではあるが、作業部会として、小人数で起草するための部会をつくりたい。

事務局 作業部会では具体的な作業をしていただくため、人数を絞って進めたい。会長に指名された方はぜひ拒否しないで、ご尽力いただきたい。

山本 12月2日に全体でもう1回会議を行う。指針の組み立てについてもう少し整理して、具体的に盛り込んだものを持ってきたい。それを議論していただいた上で、文章的に整理するという作業をしたいということである。おそらく半日程度の時間で2回位を予定している。

芹沢会長 世田谷の帰りのバスの中で事務局と話した。このメンバーでは全体的なものをつくるのは大変だから、コンサルの山本さんに素案的なものをつくってもらって、それを我々でたたくのも1つの方法。もう1つは、役所の若い職員がいるから、若手のメンバーを中心に将来的な意味で勉強としてやってもらってはどうか。我々が出ると代表幹事会のようにになってしまう。後は出てきた案を全体で議論することでいかがか。

委員D 若い人の新鮮な感覚で、情熱をこめた形でやった方がいいものが出るだろう。

山本 コンサルという立場で案を書いてしまうのはよくないと思う。議論を積み上げてまとめていくべきである。これまでの資料も議論の積み重ねによってつくっている。勝手にコンサルとしての考え方を出しているものではない。具体的な作業プロセスもメンバーの方と進めたい。

芹沢会長 では指名したい。市役所職員として、南委員、山本委員、沓間委員、小林委員。一般市民からは前田委員、林委員、渡辺委員、勝間田委員、鈴木雄一郎委員。以上9名にお願いしたい。(一同了承。後日、神保委員を追加し10名に変更)

山本 皆さん了解いただけただけということで、よろしくをお願いしたい。

以上